

# 新史料発掘：戦時下の村と生活を克明に描いた小学生 の日記―『鶴原日記』発見にいたるまで

小林 啓治

ここ10年ほど私が研究フィールドにしている京丹後市で、大変貴重な史料が見つかった。2016年7月、京都新聞社の吉永周平記者と一緒に京丹後市木津村の聞き取り調査をおこなった。目的は、役場文書などの史料群から復元される戦時中の村のようすについて、体験者に直接語ってもらうということにあった。

前もって、吉永記者が木津村の自治会に連絡をとり、当時のことを語ってもらえそうな数名の方々を紹介してもらった。7月27日、木津村を訪れ、女性2人、男性1人から聞き取りをおこなった。これらの方々は、現在80歳後半から90歳くらいの年齢で、たとえば日中戦争の開始時点で7歳から9歳、アジア・太平洋戦争開始の時点で11歳から13歳といったところである。残された役場文書からわかることがらについて、いくつか質問を試みたが、勤労奉仕や防空訓練など、史料にでてくる戦時体制について、体験した記憶を引き出すことはできなかった。それどころか、「この村では勤労奉仕はありませんでした」ときっぱりおっしゃる方もいて、少し戸惑うこともあった。役場文書にあるのだから、やってないことはありえない、と思ったが、いささか自信が揺らいた。予定していた証言者からの聞き取りを終え、さしたる収穫もないまま夕方になった。

考えてみれば、成果が乏しいのは、聞き取りをおこなった方々の年齢を考えれば当然のことであった。小学生や中学生の時の村の戦時体制を語っていただく、という課題の設定そのものにかなり無理があった。そのくらいの年齢で、自分の生活や家族、自然環境ならまだしも、戦争に包摂された村のようすを記憶していることの方が不自然であろう。2016年の時点では、戦時体制のオーラル・ヒストリーは相当に困難になっていることを改めて思い知らされた。戦争の記憶をどのような手段で伝えていくのか、早急に取り組みなくてはならない課題である。

こうしたことを吉永記者と話しながら、これで切り上げようとしたが、どうしても諦めきれず、最後に思い浮かんだ鶴原甫さんという方を訪ねてみることにした。鶴原さん（1928年生まれ）については、京丹後市役所職員の小山元孝さんから、海軍に志願されて九死に一生をえた方がいらっしゃる、と聞いてはいた。しかし、この時期の志願といえば、かなり年齢が低いはずで、村のようすについての記憶はほとんどないだろうと推測された。そのこともあって、今回の調査では、聞き取り対象者としていなかったのである。とはいえ、せっかく来たので鶴原さんに会うために、自宅を訪ねてみた。

ちょうど自宅の前でなにやら整理をされていた鶴原さんに声をかけ、訪問の目的を述べてお話を伺った。鶴原さんは、木津村役場文書などを紹介した新聞のコピーや、文集などを示された。その中に、『同級生の友』という冊子があり（写真1）、内容をざっと見てみると、とても興味深い記事があることに気がついた。それは小学生の時の「日記」を転載したと思われ、表紙の

写真まで添えられていた。もしかしたら現物が残っているかもしれないと思い、鶴原さんに確かめてみると、「あるにはあるが、個人の日記だから…」というお返事だった。私と吉永さんとで、「そうなんですけど、大変貴重な史料でもあるので、是非みせて下さい」と食い下がり、少しシブっておられた鶴原さんを口説いて現物を見せていただいた。

家の奥に入って、探し出してこられたのは、6冊ほどだったと思う（写真2～4）。手にとってみると、毎日の生活が小学生の目線で克明に描かれている。遊び、読んだ本や新聞、学校や村の行事など、ざっと見て「これは大発見！」と確信した。さらに頼み込んで、記事の素材にと、吉永記者がそれらを借りることを許可していただいた（後日、再度訪れた際に、探し出された8冊もお借りした）。

これらの「日誌」は、どのような性格のものなのだろうか。『同級生の友』に説明がある。1938（昭和13）年、3年生以上に日誌を書くことが勧められ、「自由日誌」が全員に配布されたと記されている。さらに、1940（昭和15）年2月15日発行の『木津村報』に「よく日誌を書いた人が表彰されています」とある。優秀者5名と佳良者2名の名前があり、前者の中に鶴原さんの名前があった。鶴原さん自身も、「日誌」を一生懸命書いたことを自認されていたのだろうか、よくこれだけの冊数で保存されていたことと思う。

「日誌」の内容分析については、公表の手続きをとる必要があるので、後日を期さなければならぬ。差し支えない範囲で、この史料の意義にふれておきたい。「日誌」は、1939（昭和14）年1月1日から、1943（昭和18）年6月29日までのものが残っている。ただし、1939年7月末から12月半ばまで（おそらく1冊分）が欠けている。最後の「日誌」は、「我征く、敵撃滅に〔舞鶴〕海兵団に入団につき日誌を本日で終へる」とある。先述のとおり、鶴原さんは志願して14歳で海兵団に入団されている。海兵団は、軍港の警備と新兵の教育にあたる部隊である。海軍の新兵は海兵団に入団し、5か月程度の基礎的な訓練を受けて実施部隊に配属されることになっていた。

鶴原さんの「日誌」は、私の関心に引きつけていけば、おおよそ次のような意義がある。

- (1) 日々の生活が細かく描写されており、遊びや趣味、関心のあることが記され、小学生の生活実態を知ることができる。戦時下の子どもの歴史として読み解くと興味深い。
- (2) 子どもの目を通じて村の戦時体制が描かれている。勤労奉仕、兵隊の歓送迎、遺骨の出迎え、防空訓練など、木津村役場文書をみごとに補完している。聞き取りでは得られなかった情報が、きちんと記録されている。木津村役場文書そのものが、全国的にみても超一級の史料群なのだが、鶴原さんの「日誌」が出てきたことで、39年から43年の歴史を別の角度から明らかにできる可能性が生まれた。
- (3) 鶴原少年はなぜ、海軍に志願したのか、どのような生育環境がそうした方向に導いたのか、その過程を鮮明にすることができる。もちろん、「日誌」は宿題として学校に提出したものであるから、教師の求める姿（価値観）や期待を反映していることに注意しなければならない。しかし、そのことはかえって、その時代の規範や価値観がいかなる回路を通じて内面化され、児童は主体化していくのかを、雄弁に語っているととらえることも可能である。

こうした「日誌」の学術的価値を勘案して、9月に調査に訪れた際、鶴原さんにそれらを京丹後市教育委員会に寄贈していただくようお願いした。鶴原さんは快諾され、現在は木津村

役場文書とともに、弥栄公民館の一室に保管されている。木津村役場文書とつきあわせながら「日誌」を読み解いていく作業が、当面の私の課題である。

※ 2017年2月12日、鶴原甫さんは急逝された。「日誌」を読んだ上でお聞きしたいことがたくさんあったのだが、それもかなわなくなった。この場を借りて、鶴原さんのご冥福をお祈りしたい。



写真1

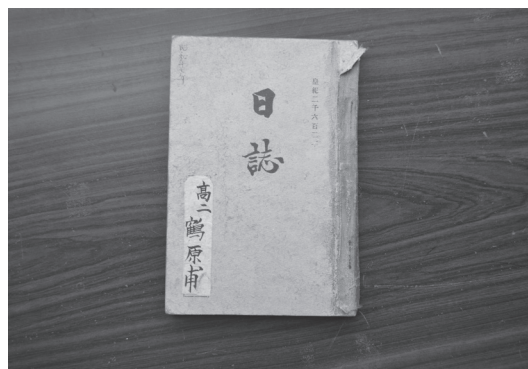


写真2

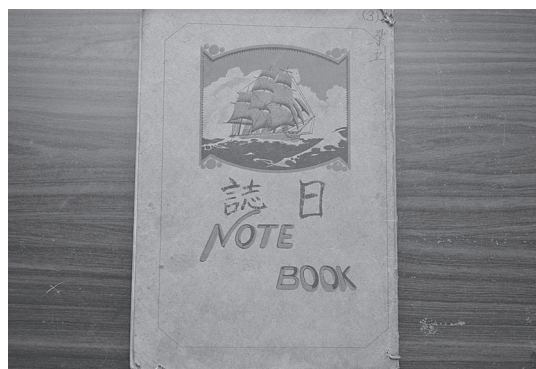


写真3

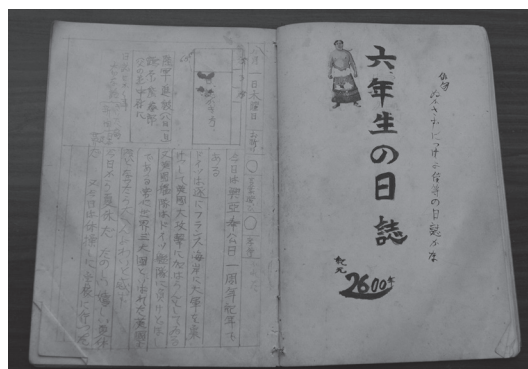


写真4